

学校

フォト劇場 (2)

写真が生まれるものがたり

〈声〉として記憶してゐるいくたりかふと思ひ出
づ校庭の傍はた
桑原正紀

教員として勤務していた頃のことを思い出す
時、学校特有の喧嘩がまず聞こえてくる。そ
の中でとりわけ大きい声や特徴的な声は、す
ぐに誰の声かわかったものだ。そういう声は
今でも記憶の底にこびりついている。

理科室へ渡る廊下のざら板のほひ濃かりき青葉
のころは
小島ゆかり

時代がよかったのか、わたしが幸福だったの
か。学校生活の思い出は、ほんやりとした明
るい陽差しのなかにある。ざら板(すのこ)
が名古屋の方言であることも知らなかったの
どかな日々が、いまわたしを照らす。



機を織るつうの眸めに似て少女らは受験の冬をしん
しんと澄む
鈴木千登世

受験生の顔になった、と言う。夏休みを終え
二学期に入る頃、下級生が青春を謳歌する傍
で三年の生徒の顔は引締まり、瞳には静かな
光が宿ってくる。教科書からつと顔を上げた
時の澄んだ眼差しをいつも美しいと思う。

校庭ゆ見ればかげ濃き窓ならびひとつひとつに声
の花咲く
三沢左右

かつて小中学生の自分は何を考えて日々を過
ごしていたのだろう。理屈は通っていないなかつ
た気がする。しかし代わりに、心を動かして
いた。理屈ではなく心を動かす言葉。なんだ、
つまりは短歌のことだな、と思い至る。